

事後評価報告書

1. 研究課題名：「前立腺、泌尿器、結腸直腸がんにおけるバイオマーカーの同定ならびに、マウスがんモデルにおける標的 mRNA・miRNA 遺伝子の機能解析」

2. 研究代表者名：

2-1. 日本側研究代表者：落谷 孝広（国立がんセンター がん転移研究室 室長）

2-2. デンマーク側研究代表者：Torben Orntoft（オーフス大学 分子医学専攻 教授）

3. 総合評価： A

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

新規の治療標的マイクロRNAが同定され、単なるバイオマーカーとしてのみならず、体液中のマイクロRNAをその機能に注目して研究した。日本側が開発したヒト前立腺がん骨転移モデルマウスを用いて、デンマーク側の希望するマイクロRNAの治療効果を解析した。ヒト膀胱がんに関してモデルマウスを活用し、これに *in vivo* イメージング解析技術を応用することで治療効果を判定した。

日本側研究チームのヒト前立腺診断マーカーの有用性を、相手国側研究チームのバイオバンクの血液を用いて実施するという、相互に補い合う共同研究が展開され、相乗的な効果により研究成果が得られた。

(2)交流成果の評価について

日本側研究チームから相手国側へ若手研究者が訪問し、相手国側研究チームが持つバイオバンクを活用した解析ができたことから、人材育成に繋がった。2011年3月の地震の影響は不可抗力であるが、計画されていたほどには活発な交流が実現しなかったのは残念である。

日本側および相手国側において、本研究交流に関するワークショップ、セミナー、シンポジウム等の開催がなかったようである。多忙な研究者間の事情を考慮したとしても、テレビ会議システムなどを利用した共同セミナーなどの開催の余地があったのではないだろうか。

3. その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

本研究交流による研究成果について、特許出願の準備中であり、実用化に向けた研究継続が期待される。また、早い段階での共著による原著論文発表が望まれる。

本研究交流の成果として、現在でも共同研究が継続されている。確立された国際協力ネットワークをさらに活用し、アジアを含むさらに全世界的な国際共同研究事業に発展することが期待される。

デンマーク側としては、日本との協力で彼らの専門とする膀胱がんや前立腺がんの動物モデル設計に成功し、今後の研究の進展が期待される。